

令和7年度 太田市美術館・図書館運営委員会 摘録

◆日時 令和7年12月18日（木）午後1時30分～午後3時30分

◆会場 太田市美術館・図書館 3階視聴覚ホール

◆出席者

【委員】 尾崎委員長、川上委員、杉浦委員、染谷委員、鳥塚委員、花井委員、森委員
※杉浦・鳥塚委員についてはオンライン参加

【事務局】 富岡館長、桑原館長補佐（管理係長）、大川館長補佐（学芸係長）、
鹿山係長代理、山田係長代理、増田主任、矢ヶ崎主任学芸員、佐々木主事

◆議題 ①令和6年度・令和7年度（中間）事業報告について
②令和8年度事業計画について
③その他

◆配布資料

- ・ 会議次第
- ・ 委員名簿
- ・ （資料1）令和6年度・令和7年度（中間）太田市美術館・図書館事業報告
- ・ （別冊1）「太田フォトスケッチ vol.6 ささやかな話、確かなこと」
実績報告書
- ・ （別冊2）「原田 郁・衣 真一郎 リポジトリ：内と外で出会う」
実績報告書
- ・ （別冊3）「ものづくり vol.2 演劇クエスト 町場のメリヤス」
実績報告書
- ・ （別冊4）令和7年度図書館イベント報告書
- ・ （資料2）令和8年度太田市美術館・図書館事業計画（案）
- ・ （資料3）令和8年度美術館・図書館事業カレンダー（案）

◆会議の内容

1. 開会

2. 挨拶

3. 議題

議題① 令和6年度・令和7年度（中間）事業報告について

事務局が資料1、別冊1、別冊2、別冊3、別冊4に基づき説明を行った。

（委員）

文化振興事業費の市民参加型事業の令和7年度予算額について、前年度決算額の倍くらい出ているがこの要因は。

（事務局）

予算額と決算額の違いということもあり、予算を多めに計上しておいて最終的に不要額が出てくるとも見込まれる。あとは世界の子どもの本展の予算が計上されていることもひとつの要因だ。

（委員）

市民参加型事業の決算の仕方としてはいい傾向だと思う。今年の展示会は図書館エリアに作品をちりばめて配置したり、展示会を見に来た人に冒険の書を渡して街に解き放ってみたり、色々な試みをしている感想を持った。

（委員）

喜ばしいことに図書購入費が上がっている。これは市長が変わったからという理由ではないと思うが、どのような理由か。

（事務局）

物価高により本の単価が上がっているのが大きい。

（委員）

本も価格がだいぶ上がっているから、これを理解していただいているのはありがたい。またこれを下げられないようにしたい。物価が下がらない以上そういうことはないだろうが、嬉しく思った。

視聴覚ホールの利用や視察件数の減少対策として、PR的なものが必要ではないか。昨今はAIの時代になってきていて、PRに特化したAIがある。「PR Master」というのが日本で最初にできたPR用のAIなのだが、最近は他の会社のもたくさん出てきている。今回も色々な事業を広報しているようだが、PR Masterは契約しているマスコミがけっこう多い。この図書館は全国区の図書館なので、地域の方に限らず、建築の方や色々な方が太田のことを知っている。そこで、太田がどんなことをやっているのかをSNSを使いながらも広報していくのがいいのではないか。PR Masterは使うとSNSの広報もクリアできるように、いま開発が進んでいる。私もすこし関わったというか、和歌山の実例を見せてもらったことがある。興味があれば契約をしなくても紹介もできると思う。

昨今は色々な事業があって、行政の皆さんも広報に困っていらっしゃる。広報するにしても、地域に限定されるようだとここはすごくもったいない。コンサルタントを雇うよりも全然安く、契約すると市役所全体で使える。それを美術館・図書館がコントロールすれば、太

田市の全情報を扱えるし、図書館の役割としてうまく回転すれば面白いと思う。色々な図書館で、AI をうまく取り入れたらいいと思っている。

もう一つ、図書の分類で文学（9類）が3年前から増えている。ここの立ち上げのとき、文学は買わないという方針だった。いい悪いではなく、どういう線引きで購入されているのか。

（事務局）

9類は他の図書館よりは少ない方だと思うが、選書ミーティングの中でリクエストがあったり、あとは美術に関連した9類も中にはある。その辺は考えてやっていきたい。

（委員）

「まちじゅう図書館のちょこっと講座」とか、「まちじゅう図書館長のおすすめマンガ」はすごく面白い。やっと美術館と図書館のコラボレーション館になってきたのかなと感じた。

あと演劇クエストの〈冒険の書〉だが、これは今年しかダメなのか。来年はできないか。シリーズ化したほうがいい。

（事務局）

〈冒険の書〉は会期が終わったあとでもそのまま使えるが、私たちが想像しているよりも速く街が変わってしまう。作中でポイントにしている場所がすでに2つ変わっている。以前から太田をよく知っている人は想像で補えると思うのだが。

（委員）

逆にそれが面白い。変わっちゃったんだっていう。作業するのは大変だけど、町のアーカイブがゲーム形式になっているのはすごく面白い。できれば縮小してでもなんとかシリーズ化して、毎年美術館・図書館はこれをやっているということがPRできれば、それなりに人が来ると思う。できれば外国人向けもあったらいいなと思った。

（委員）

〈冒険の書〉については私も気に入った。これで展示の中も見てみようという、非常にそるものがあった。こうやってゲーム形式に仕立てていくのは、太田の魅力を作っていくものと思う。

ものづくりの vol.1 はたしかアイリスのボタン展だった。あれは美的要素が高かったが、やはりボタンそのものが小さいので、ボリュームとしてはこれだけという感じで終わってしまった。今回の展示も申し訳ないけれど非常に地味で、町の資料館のようだ。ハンガーにかかったニットがあっても作品と感じられず、空間として魅力を感じない。むしろゲームのほうに軸足を置きながら、その結果を展示とコラボレーションするなどがよかったか。もちろん今回初めての試みなので、その辺は開拓の余地があるかなと思った。

それからリポジトリ展について、図書館の中にも展示を広げるのはこの館ならではの面白さだ。真っ白な壁床にカラフルな展示があると非常に目を引く。その意味で楽しい展示だった。半面、説明にもあったように渾然一体となって分かりづらさもあり、それが狙いといえればそうなのだが、そういう難しさも若干あるかな。

先ほど学芸員が台湾のセッションに参加したという話もあった。美術館・図書館というコンパクトな施設だが、こちらが先行して、相手が真似をするくらいになっていけば面白い。

(委員)

〈冒険の書〉はいままでで一番理念に沿った企画だと思う。

(委員)

美術展の評価数値で、図書カード利用者数というのがあったが、これはどういう意味なのか。

(事務局)

リポジトリ展の実績報告書の数値目標で、図書カード利用者数が目標に達しなかったということなのだが、当館の料金体制として一般料金と割引料金がある。割引料金では入館料が100円引になる。どのような方が割引に該当するかというと、図書館カードをお持ちの場合と、団体割引20名以上という場合の2パターンがある。図書館利用者の観覧率が低いという課題があったので、このような目標を掲げたがうまくいかなかった。

(委員)

理解した。この建物は美術館としてみると、展示室が狭いというのは前から指摘されていた。その突破口として広い図書館部分を利用するというのは、今後もっと開発していいと思う。

それで、懸念されたように作品を触られるケースが多かったとのこと。対策としては触ってもいいものを設置するとか、展示ケースを開発するとか、色々な手法がこれから考えられる。あとはビデオアートとかであれば対策は難しくない。もっと図書館のスペースにアートを広げていくほうが、融合施設としてこの建物の可能性が広がる。

さきほどの〈冒険の書〉のように、地域を広げて拡大していくというのはまだ追及の余地がある。駅なか文化館もあれほど近くにあるので、連携できるのではないか。管轄が異なるといった話はあまり聞きたくない。同じ太田の展示施設なので、大型の展示をするなら連携すべきということを今回強く感じた。

〈冒険の書〉はもっと色々なやり方が多分あって、本という形式だから面白いということもあるが、ゲームスタイルならいっそのことデータ化してアプリにするとかはどうか。全然違う方向ではあるが、そういう展開の仕方はある。メリヤス以外のテーマでまた街なかを巡ってみる。街なかの美術というとビエンナーレみたいなイベントがあるけれど、これは本ということで、ちょっと違うスタイルになる。もっと開発していけそうな、ブームになりそうな気配すら感じる。今後も追求して、新しいテーマでもう1回やってほしいと同じ作家に頼んでもいいのではないか。

(委員)

図書イベントをこんなにやっていただいて素晴らしいなと思った。月に1回くらいだろうか、小さい子や小学生を対象にしたものが行われている。小学3~4年生くらいまでは読書をする子が多いけれど、高学年になると両極端になる。本から離れている子どもに向けて、読書に興味を持ってもらう図書イベントがあるといいのかなと思った。

それから、美術館・図書館で私が思っているのは、挿絵の素晴らしい本がたくさんある。とくに海外の本だが、海外のああいう本はとても高価なので、もっと色々な学校の子どもたちにあのような本を触れさせたいと前から思っている。県立図書館だと20冊セットにして学校に貸出を行うような事業もある。触られないで終わってしまうのはもったいないので、何らかの形で本が動くような、イベントの中に呼び込んでもらえるようなものがあるといいと思う。

(委員)

学校との付き合いは最近どんな感じだろうか。美術館の来場者数が目標に達していないということが資料にあった。数を稼ぎたいということではないが、小中高、保育園、幼稚園、こども園とある中で、美術館・図書館の周りにどのくらいの距離で教育施設があるのかを地図で見ると、距離的に近くないところも多い。例えば太田女子高校で徒歩25分、太田高校だと徒歩20分くらいで、来れないことはないが多少距離がある。

前に美術館・図書館に伺ったとき、高校生たちがみんなで楽しんだりくつろいだりしている様子を見ていた。その子たちに美術館に入ってきてほしいところだが、学校の課題に美術館訪問を絡めるなどはしているか。今年の夏は非常に暑かったものの、いま各所で夏休みの課題として、美術館に行くことを課しているところもある。高校生とか中学生のような、ある程度自分たちで動ける人たちへの働きかけという面で、美術館・図書館のほうから学校に行く、アウトリーチがどうなっているかを伺いたい。

(事務局)

学校との関わりについてだが、リポジトリ展について資料に観覧者数の内訳がある。子ども団体観覧ということで、各小学校・中学校からお越しいただいている。いまの原倫太郎・原游展では、隣にある足利市の白鷗大学足利高校の美術部の生徒さんが、アーティストトークに団体で申し込んでくださった。あと、伊勢崎高校の美術部の生徒がアーティストトークに来てくれた。この高校では冬休みの課題で、先生が1年生に美術展にスケッチをしてきなさいという課題を出しているようで、その受け入れの問い合わせもあった。これは希望者のみだが、実際にスケッチに来る学生さんもいると思われる。

アウトリーチについて、原倫太郎・原游展ではアウトリーチをして、市内小学校でのワークショップの成果をご覧いただく内容となっている。マンパワーの関係もあってすべての展覧会ではできないが、展覧会ごとにできる範囲でバランスを考えてやっているところだ。また、前のリポジトリ展や今回の展覧会では、近隣の美術部の生徒さんあてに、運営担当から展覧会のチラシを別途送ったり、学生さん向けのイベントがあるというお知らせを最近お送りするようにしている。その成果が徐々に現れていると思っている。

(委員)

自治体によって規模も状況も全く違うので、太田市がどうなのかは分からないところがあるけれども、これもマンパワー次第ということになってくるだろうか。ボランティアの方たちもいらっしゃるが、活動が数的に充分かということもある。世田谷美術館などは、小学4年生や中学2年生が来るように、区が主体になってバスを出すということをしている。世田谷は行政がそういう努力をして、それを美術館のほうで受けている。世田谷美術館は運営が財団になっているはずで、直営ではないので美術館・図書館とは事情が異なるところもあ

る。美術館・図書館ではそういうのは対応しきれないと困ってしまうかもしれないが、意見として思った。

（事務局）

学校については校長会の場で美術展の案内をしているのだが、今回は地元の中央小学校5年生にワークショップに参加いただいた経緯もあり、そういうアウトリーチという観点から、あらためて校長会での説明と案内をした。お話があったように市のバスを使ったりだとか、あとは小学2年生が生活科の学習で施設見学に来ていただいたりするの、そこで美術展を絡めるといったことを今後検討していきたい。

（委員）

美術展の報告書でターゲット層を書いているところがあるが、ダイレクトに「小学生」「中学生」「高校生」と書いたらどうか。ターゲットに設定すれば、嫌でもそこに向かっていかないといけないので。これはやるべきだとまでは言わないが、報告書にあるターゲット設定のところで、例えば「美術ファン」とか「建築ファン」「太田市民」となっているところに「小学生」と入れてしまう。いまの時代、美術館が社会教育施設として果たすべき役割は次世代の育成だと思っている。次の人たちが20歳を超えて、30、40歳になるときにも美術館に行こうと思ってもらいたい。

美術館・図書館では「あかちゃんと楽しむ美術館」も続けてくださって、すごく嬉しく思っている。たとえ参加者が集まらない回があっても、めげずに続けてほしい。美術館では次世代の育成がすごく重要で、それをやっておかないともう立ち行かなくなっている。美大の学生でさえ美術館に行かないという時代であり、もし招待券をもらえるなら行くかなという意識の学生、時間とお金を使うにしても自分の好きな作品を作ればいいという学生が多い。他者の作品を知って自分に活かしていく心持ちがどんどん減っていると、現場にいて感じる。鑑賞の重要性はこれからますます高まるとしか思えない。なので、美術館・図書館にはすごく期待しているし、何かお役に立てたらいいなと思っている。

（委員）

図書館の方で委員が先ほどおっしゃっていたように、報告書を拝見して子どもの本関係のイベントを本当にたくさんやってくさっているんだと、感動しながら伺った。

折り紙とか栞づくりのワークショップは、JBBYで行うときにも本当に人気がある。折り紙で作ったものを子どもがほしがったりして、いまどきの子どもも折り紙が好きなんだと感じる。これらワークショップも大変好評だったと報告していたが、年に1回でなくて、いつ行ってもそういうコーナーがあるよ、いつでもできるよ、みたいなものを目指して、スタッフやボランティアも大変だと思うが、すこしずつ年間の回数を増やしていければ、足を運ぶ方が増えるのではないかな。

小学校の高学年が多分もっとも難しい世代と思う。もっと小さな子は親が連れていくだろう。大きい子や中高生は自力で行けるかもしれない。しかし小学校の高学年ぐらいが、自力で図書館に行くのが一番難しい世代のターゲットだ。

謎解きのイベント（デューク・ポッポからの挑戦状）もやってくださって、あれもすごくいいと思うが、ちょっと難しめの、大きい子が興味を持てるようなゲームやワークショップをコンテンツにしたイベントも、年に2回ぐらいやれたらいいのではないかな。

この夏に IBBY で韓国で子どもの本の大会があった。私も参加したが、日本の絵本作家のあべ弘士さんが招待画家として行かれて、韓国にある美術館・図書館みたいな施設で公演をした。そこでは小学生が 100 人以上集まっていた、よくこんなに集めましたねという話をしたら、近隣の学校から 1 学年全員連れてきたということだった。それで、来た子たちは本当に楽しそうに集中してやっていたので、こういうのはその場所に来れば絶対楽しいと思う。

最初はえこひいきになってよくないのかもしれないけれど、1つの学校をまるごとご招待みたいなものを進めていけば、それが評判になってうちもやってほしいという声が出て、どんどん広がっていくのではないか。公立のところは最初の1歩がすごく難しい。美術館・図書館はフリーが売りの場所だと思うので、色々挑戦していただけたらいい。

(委員)

学校との連携の話が出ていたが、校長会で説明は毎月できる。小学校は秋にどこの学校でも、平面作品の授業を行っている。色々な展覧会から募集がかかっているの、それに合わせている。その辺で例えば9月とか7月とかに声かけをするのもいい。学校に図工・美術に関係する先生もいるから、それなら美術館・図書館に行ってみましょう、となるのではないか。それから、いま太田市は小学4年生に演劇を見せ、中学生には群馬交響楽団などの音楽を聴いてもらっている。そういうのを考えると、ここではせっかく色々な展示をしているので、小学校に例えば「何年生鑑賞に来ていただくのはいかがでしょうか。」とか、あとは太田市全域が大変なら地区ごとに分けて、今年は新田地区、今年は尾島地区とか、そういう風にして呼びかけるのはどうか。

いつも思うことだが、言い方はおかしいかもしれないけれど、無理やりにも1回連れて来てみないと、一生美術館に足を運ばないお子さんが出てきてしまう。修学旅行で京都に連れていくから京都に行くような感じで、何らかの形で図書館に子どもが来てみる。そして、子どもたちはそういうのは嫌いではない。来ると静かにしてすごくよく見る。そういうところを教育委員会と連携を取っていただけるとありがたいと思う。

(委員)

マンパワーというか、学校との連携のことで思いついたのだが、私が美術館に勤めていた頃、そこでは学芸員がいまでも7人いるし、私がいた頃は最大9人までいたことがあるが、それでもやはり人手が足りないときに人を増やしてほしいと言った。それで新人は採れないけれど学校の先生なら増員できるよと言われて、それに飛びついて学校卒を1つ確保した。それはいまでもずっと残っている。当時は希望した人だったけれど、学校の美術の先生が美術館の学芸の部署に何年かいることで、学校関係の連携がやりやすくなった。ここは本当にマンパワーの問題はあると思うが、とにかく人を頼ったほうがいい。

協力したい人は外部に必ずいる。例えば中学高校、太田だけでなく近隣も含めて、美術の先生のリストくらいは作って、そこにメールで絶えず展覧会の案内を送るとか、アイデアがあれば協力しますからぜひとお願いしてみるとか。誰か1人でもここで何かやってみようという気になる先生が見つければ、それが連鎖反応になっていく。校長会の上から投げるのもいいけれど、もうピンポイントで、どの先生がどこの学校にいるのかを抑えて、ダイレクトメールを送ってしまう方がいいと思う。当然こちらも時間が割かれるけれど、そこはもう我慢して付き合っていく。こういうことをやりたいという、外部の力はどんどん取り入れるようにする。私は群馬県立近代美術館でボランティアを養成した経験があるが、いまボラン

ティアがあることでものすごく助かっている。団体さんが学校から来るときも、ボランティアがみんなに張り付いて生徒たちに案内してくれたりする。

ボランティアを育てるのはものすごく大変だったけれど、もうすっかり定着したので、いま群馬県立近代美術館でボランティア抜きに教育普及活動は考えられない。美術館・図書館でそこまで大々的にやるのは大変だろうが、とにかく外部をうまく利用することをやってみるといい。

(委員)

やはり教育委員会ともっと連携していくことがこれから大事と思う。現場の先生方は非常に忙しくて、なかなか美術館に来ること自体もないだろうし、働き方改革の影響もある。例えば美術主任の先生は各学校にいて、主任会自体がいまあるのかどうか私も分からないが、そういう会議自体を美術館で用意して無理やりでも来てもらう。美術館・図書館に来たことがないという先生が圧倒的に多いと思うので、そこでつながりができる。

それからさきほど話にあった、現場の先生方にうまくスタッフとして入ってもらうというのは、館林美術館はたしかやっている。すぐにするというのはなかなか難しいだろうが、そういうことも大事だろう。

話が飛ぶが、折り紙教室が非常に好評ということだった。多分、このあとシリーズ化していくのかもしれない。折り紙は日本の文化なので、ぜひ継続していくことをお願いしたい。太田は自動車の製造が盛んで外国の方がたくさんいるので、言語の問題はあるだろうが、彼らをターゲットにするやり方もあるだろう。そして折り紙はそれだけでなく、ペーパークラフトにも発展していく。平面から立体にガラッと変わっていく。子どもたちだけでなく大人にとっても、変化していく様子は非常に興味がそそるものがある。やりようによっては巨大化したものをやるとか、作ったものを全部展示して1つの成果をみんなで見るとか、色々考えられるところだ。

ポップアップというか折りたたみの仕掛け絵本について、以前企画コーナーで展示していたことがあったと思う。その流れで仕掛け絵本展というのは実現が難しいかもしれないが、こう絵本がガラッと変わっていく様子というのは誰でも楽しめるので、そういう展示ができたら楽しいだろうなと個人的にはずっと思っている。いつかこのことも考えてもらえるとうれしい。

議題② 令和8年度事業計画について

事務局が資料2、資料3に基づき説明を行った。

(委員)

開館10周年記念で何か楽しいことをやりましょう。ぜひお願いします。

(委員)

子どもたちへの本のサービスはすごく豊かになってきているが、ここの館の理念からすると、もうすこし大人へのサービスがほしい。建築とかアートの本、他の図書館では持ってい

ない資料がここにはあるので、なかなかスケジュールが厳しいとは思うが、来年度・再来年度の計画の中に大人へのサービスも混ぜてほしい。ここはまさに全国区の図書館なので。

建築ってなんだろう？というの1つのテーマになると思う。それで、1つのテーマはそれだけでやっても面白くないので、例えば「建築×子どもたち」とか、すぐには意味の分からない組み合わせを掛け算してみるのはいかがでしょうか。

なぜかという、最近若手の建築家がすごく本を書いている。日本で図書館を作っているのは大きな会社もあるが、個人事務所の「MARU.architecture」（高野洋平+森田祥子 / MARU.architecture；以下 MARU）というところがある。この MARU が日本でいま図書館をたくさん手がけている。伊東市の図書館の作家も MARU で、これは中止になってしまっみんなかわいそうと言っていたが、そういう現在の日本で勢いのある建築家が何を考えているのかはみんなが興味がわくところだろう。そういう話を聞けるとなると、東京からも人が来る。

あと、いま世界で活躍してる女性建築家で大西麻貴さんという方がいる。この方もすごく活躍していて東京にいるし、費用がかかるかもしれないけれど、本の宣伝しますと言ってそういう人を連れてくるのはいかがでしょうか。私の知っている限り、建築家で本を書いている人が相当いる。それを図書館の中で企画していくのはありかなと思う。

また、それに対応してスキルが必要だ。図書館の職員の中に建築とかアートの分かるスキルのある方がいるのか。いますぐにその人選をするというのはできないかもしれないが、今後この図書館に合うスキルを持った人選を非正規の方でもしていく必要がある。これは司書でなくてもいいし、司書は何人かいれば大丈夫だと思うが、スキルを持った人をもっと活性化して働いてもらう。そうするとその人の目線が違うので、それまでと違った企画を立ち上げることができる。

今日の読売新聞に、絵本の専門家についての記事が載っていた。そういう専門職があるというのを世間も認識しはじめた。図書館でもそういう人がいるよ、というのをきちんとやったほうがいい。それは絵本に限らず、アートに詳しい人がいる、建築に詳しい人がいる、というように。せつかくその資料があるのだから、サービスするときに、この本面白いですよとか、こっちの方も面白いですよと言えるような、そういう人が美術館・図書館にいい。

最近、「クリエイティブ・マネジメント」という言葉が流行というか、使う人が出てきた。要は単に1つのビジネススタイルではなく、クリエイティブな観点からマネジメントしていくというものだ。言葉としてはクリエイティブ・ディレクターという人もいれば、クリエイティブ・マネジメントという人もいるけれど、そういう本がけっこう出ている。世の中には足し算だけではなく、掛け算、情熱とか創造性とかで出てくるスキルマネジメントが必要ということが書かれている。ここはまさに美術館×図書館でもある。私が読んだ『クリエイティブ・マネジメント』（著者：柴田雄一郎）という本、なかなかいい本だが、そこから紐解くと色々な関連本が出ている。そういう価値観もありではないか。

昨今、ウェルビーイング的な図書館を作りたいというところが出てきた。お客様をどうやって幸せにするかというのはサービスとして難しく大変だけれど、その価値観を持ちながら、持っている資料をどう活かすかが大事。企画をやったりとか、今回のものすごく面白いとは思いますが、もっと幅を効かせてもらいたい。

（委員）

さっきもお話しがあったけれども、1回の出会いが子どものアート人生を変えることがある。太田の子どもたちがこれからアートのある人生を生きていくかどうか、美術館・図書館がすごく関係してくると思う。できることを何でもやっていくのが肝要だ。

資料では美術館の目標というか、やることの記述に「市民」という言葉がたくさん出てくる。すごくいいなと思うが、他方の図書館は子どもたちが図書館を身近に感じてもらえるようにということと言語化されている。言葉で出てくると、よくも悪くも縛りになる。

学科の特性上、学生にも「市民」って誰？という話よくするけれど、定義がとても広い。社会は1人1人の市民が作っていくその総体だと思うが、その市民の解像度を上げて言語化するというのもありというか、そういう方がカッコいいのではないかなと思う。建築もそうだが、美術館・図書館はカッコいいというイメージがあって、やっていることも先進的なので、そのミッションのところに言語化したターゲットの明確な記述がパーンと出てくると、ほかからも注目を集めていいと思う。他の美術館はここに皆関心を持っていて、私も「あかちゃんと楽しむ美術館」について色々ご紹介したりしている。

(委員)

10月の世界のバリアフリー児童図書展について、毎回やっていただいて嬉しい。展示される本は子ども向き児童書ではあるが、いま日本では子どもに限らず大人も対象に、各出版社が読書に対するバリアフリーに力を入れている。ぜひこの図書展をきっかけに、子ども対象だけでなく、また視覚障害だけでなく、色々な意味でのバリアフリーが認知されるとよい。太田市だったら外国の方への読書会をやってみるとか、工夫していただけたらありがたい。

(委員)

熊本市現代美術館の学芸員をしている本学大学院の修了生が赤ちゃんの鑑賞プログラムに関心をもってきている。彼女は日本画の鑑賞が専門領域で、子どもたちと日本画をつなぐ研究もやっているのだが、熊本の赤ちゃんたちと日本画を見るプログラムをしたいという。太田で赤ちゃんのプログラムを続けていることが、彼女の支えになっている。あかちゃんプログラムをいきなりやると言っても、それ前例あるの？と言われてしまうところ、いや太田市がやっている、それも継続している、ということが本当に他の学芸員の支えになっている。そのことをこの場を借りてお伝えしたい。

(事務局)

たくさんのご意見ありがとうございます。いただいた色々な意見を今後取り入れていきたい。

先日、当館の学芸員が台湾のセッションに参加したが、現地でも当館がかなり好評をいただいているということを新しい市長にも報告した。市長からは世界に羽ばたいてという言葉もいただいたので、いままで評価されてきたことに積み上げて、新しいことにも取り組んでいきたい。

議題③ その他

(特になし)

4. 閉会